

この頃、弓術界は競射全盛の時代である。すでに明治二十年代には学生弓術が普及し始め、各地で盛んに大会が開かれていた。二手に分かれ、両者の総的中数で勝敗を決める源平試合が主である。

研造も、学生たちとの稽古では競射を徹底的にやり、対外試合にも積極的に連れ出した。彼らがメキメキと腕を上げ、試合で優秀な成績を残してくれることが嬉しくて仕方ない。

競射は非情である。結果への過程がどのようであろうと、中たつたか中たらないかで全てが判断される。個人戦なら失策の悔しさも自分一人のものだが、団体戦ともなるととても居たたまれず、自然、一人稽古とは違う真剣味が出てくる。

人はしばしば極限状態に追いつめられると、信じられないような集中力を発揮し飛躍する。この競射もその辺りの人間心理の機微を掴んだ稽古方法であった。

しかし、対外試合に夢中になっていくうちに、研造は重大なことに気がついた。的中に対する自分の考えが良く伝わらず、結果的に、理想とはかけ離れた指導をしていたのである。

本来、正射の結果であるはずの的中が、直接の目的になってしまっていた。学生たちは、「的中させるためには、どうすればいいか」、「どこそこの大会の優勝校は、何本の中した」という発想をするようになってしまっている。

(これではいかん)

競射、競射と言っているうちに、いつの間にか的中が至上のものとなり、鬭争の具になってしまったのだ。

「正射必中、正しい射を追求した結果としての的中ならば、何も問題はない。しかし、逆は必ずしも真ならず。果たして、学生たちの中は正射の結果だろうか。正射の正とは、そんなに簡単に備わるものであろうか。いやそもそも、正とは一体どんな状態なのか……」

「中てればいいってもんじゃない。姿勢さえ正しければ、中たらなくていいんだ」

赴任当時あれほど重視した中だったが、やがて研造の指導は大きく変わっていった。本多も説き及ばなかった弓術の本質を伝えようと、試行錯誤を始めたのである。

だが、真意はなかなか伝わらない。研造自身、まだ心術を追求している途上であり、自分の経験したものを具体的に語れるところまでは達していなかった。

「おい、近頃、先生のお教えは精神論の度が過ぎやしないか」

「うむ、俺もそう思う。中たらなくても良いと仰りながら、ご自分では外すことはまず無い。矛盾しているよ」

戸惑ったのは学生たちだけではない。波紋は弓術界全体に広がっていった。二高弓術部師範という地位は、東北地方の弓術界に少なからぬ権威と発言力を持っている。その上、二高赴任の翌年には、帝国大学弓術部秋季大会競射の部に研造自身が出場し、一等となっていた。

当時、総合大学は東京帝国大学しかなく、帝大といえば東大のことである。そこで催される弓術大会は広く門戸が開かれ、各地の代表的な射士が出場していた。当然のことながら、優勝者は日本有数の弓取として、全国の射士に注目される。

「中たらなくてもいいんだ」

言葉の断片が独り歩きし、瞬く間に広がっていった。

「阿波君、ちょっとよろしいかな」

学校対抗の競射会だった。今日の大会委員長を務める阿部が声をかけてきた。士族の出だと聞いているが、着物の似合わない貧相な男である。

「君は学生たちに、的中はいつでもいいと指導しているそうじゃないか」

(またか……)

射士たちの集まりへ顔を出すと、近頃は必ずと言っていいほど長老に呼び止められる。相手が自分の考えに興味を示してくれるのならいいが、大抵は悪意を持って質問してくることが多い。揚げ足を取ろうと、あの手この手で質問を浴びせかけるのだ。

「どうでもいいと言っているわけではないんです。的中は究極の目的ではないと教えているのですが」

「はっは。それは君、おかしいな。的中は正射の結果じゃないか。君は竹林に宗旨替えしたそうだが、的中を目的としない弓術というのは、一体誰に教わったのかね」

「的中に関する見解だけでなく、流派をめぐる感情論もありそうだ。こういう話につき合い始めると、時間が幾らあっても足りない。議論は平行線になってしまい、無駄骨を折ると分かっているのだが、黙っているわけにはいかないのが辛かった。」

「先生、先生はやはり的中が究極の目的だとお考えですか」

「何、当たり前だよ。弓というの中てるための道具じゃないか。我々弓術家は、古来どれほどの苦勞をして中ててきたことか、君もよく知つとるだろ。私は現役を退いた今でも的中率八割を維持しておるよ」

「どうも長老の一番言いたいのはこのことらしい。」

「それは大変な成績です。しかし先生、的中と内面的な高まりとは必ずしも一致しないのではないでしょうか」

「そりゃあ、まぐれ中たりということもあるだろう。しかし的中の多くは、正射の結果だよ」

（その正射の結果、あなたは人間的にどのように成長しましたか）

「そう言いたかったが、俗物根性丸出しの長老を見てしまつては、かんげん諫言する気力も出てこない。」

「いえ、的中が全てではない。もっと精神的な深みを追求しようという意味で言っているわけ」

です」

「君、馬鹿を言っちゃいけない。精神的な高まりと言ったって、まるで具体性がないじゃないか。高まるとどうなるのかね。君は人と違った特別な精神でも持っているのかね」

阿部はしたり顔でキュツと胸を張った。弓術の厳しさを知らない若造を懲らしめている満足感でいっぱいらしい。

悔しいが、そう言われると研造としては返す言葉がなかった。心の問題だから確かに具体性に欠けるし、その成果を人に見せられるような境地にも達していない。

「いいかね。そもそも中を否定する君が、何でこんな射会に出場するんだね。矛盾していると思わんか」

阿部は興奮のあまり、自分の立場も忘れて一気に畳みかけてきた。

「……」

「うん、どうだね」

勝ち誇ったように薄ら笑いを浮かべながら、阿部は右の拳で机をさかんに叩いた。

（ええ、実は私も矛盾を感じながら出ているんです。的中数で勝敗を決めるこんな大会など、止めてしまった方がいいとさえ思いますよ）

大きな声でそう叫んでやりたかったが、いま禍根を残してしまつては、弓術界の改革が永遠

にできなくなる。

(俺が高まるしかないんだ)

溢れる怒りと悔しさをぐっと抑えると、研造は黙って審査員席に着いた。

弓の歴史は的中精度追求の歴史でもある。自然物を材料として、勘と経験をたよりに制作されるこの弓は、何しろ中たらない。

職人たちは世代を重ねて数々の工夫を凝らし、性能を向上させてきたが、その工芸品とも言える精密な細工が災いして、和弓を非常にデリケートな物にしている。

例えば、外竹と内竹の間には、外側に櫛はせなどを側木そばきとして挟み込み、強靱きょうじんな反発力を得ている。また、側木と側木の間には、薄く削った竹を何枚も張り合わせた「ひご」が仕込まれており、鋭い矢飛びを生み出している。現代の材料力学で言うH型構造である。切り口を見てみると、まるで寄せ木細工のように繊細な作りだ。

それだけに、弓は温度や湿度など環境の変化にとっても敏感である。季節によって形が変わるのは勿論、朝、昼、晩でも反発力に変化が生じ、狙い所が違ってくる。

また、そもそも矢を真っ直ぐに飛ばすのも簡単なようでなかなか難しく、特殊な技術が必要となる。